

〈論文〉

アルフォンソ・レイエスのアメリカ論

柳原孝敦 (東京外国語大学大学院)

I

今世紀イスマノアメリカの思想史・文学史上でのアルフォンソ・レイエス Alfonso Reyes (1889-1959) の位置づけは既に一定している。定石に従えば、まず彼は青年文芸協会 Ateneo de la Juventud (以下、アテネオと称す) のメンバーのひとりとして論じられるのが常である¹⁾。アテネオとは、メキシコ革命前夜に集った若き知識人たちのグループであるが、彼らの特徴づける主張内容は、当時メキシコの知的世界において公式のイデオロギーとして機能していた実証主義への反発から、形而上的思索や人文諸科学の復興を唱えたことであり、また独立以後百年の性急な西欧化・近代化の試みを反省し、自国メキシコ——およびイスマノアメリカ——の伝統を再評価しようとしたことである。そのような主張を展開したアテネオとは、つまりイスマノアメリカ文化の模索という大きな思潮の中に捉え得るのであり、そのような思潮を生み出したホセ＝エンリケ・ロドのエッセイ『アリエル』(1900)の後継者と言い得るのである。

69人を数えたアテネオのメンバーの中でもレイエスは²⁾、ペドロ・エンリーケス＝ウレーニャ、アントニオ・カソ、ホセ・バスコンセロスらとともに、いわば四天王と称される。最初のまとまったイスマノアメリカ文学史とも言い得る『イスマノアメリカ文学の潮流』(1945)を記したことや、多くの文人・文学研究者を育てたことで有名なエンリーケス＝ウレーニャ、反実証主義哲学体系の構築に一生を捧げたカソ、メキシコ革命に参加し教

育大臣まで努めたバスコンセロスら他の主要人物との比較で語られる際のレイェス評価は、「アルフォンソ・レイェス、彼は後に優れた文士となった³⁾」というジーン・フランコの短いコメントに端的に表現されている。レイェスはまとまった文学史も思想体系も残しておらず、革命期の大半を国外に過ごし、行動によってその存在を示したわけでもない。またその文筆活動においては、詩や短篇を残してはいるが、それによって多くの読者を獲得した訳ではない。むしろ彼の得意としたところは、古典ギリシャから現代にいたるまでの該博な文学的知識に裏付けられたエッセイであり、その意味で作家ではなく「文士」*hombre de letras*というフランコの語の採用は解されるべきである。

しかしながら、反実証主義、イスマノアメリカ文化の模索、人文主義、等という形容はアテネオのメンバーの共通項の特徴であり、レイェスに対する「文士」という表現は漠然としすぎている。まだ我々はレイェスその人の思想には触れていないのだ。具体的なレイェス評として、例えばアレホ・カルペンティエールの意見を見てみよう。

アルフォンソ・レイェスは、私にとっては、偉大なる師でした…。彼は今世紀初頭のラテンアメリカの知識人たちの師であったのです。

[略] 私はレイェスを読み、彼と話しました。彼は私に、正当な意味で我々のもの、土着のもの、アメリカ的なものについての知識を通して世界を認識することを教えたのでした⁴⁾。

ベネズエラの批評家マリアノ・ピコン＝サラスも、『征服から独立まで』（1944、邦題『ラテンアメリカ文化史』）のエピグラフにおいて、彼にオマージュを捧げている。

偉大なユマニストにして作家、／アルフォンソ・レイェスに捧げる。／その明晰さによって、アメリカにおける／我々に共通の希望に規範を与え、／何を学ぶべきかを教えてくれた／幾つもの対話の思い出に⁵⁾。いずれも一回り下の世代に属するカルペンティエールやピコン＝サラスは、レイェスを彼らのアメリカについての思想・アメリカ観における師と

見做していたという点で一致を見ている⁶⁾。このような評価は概説的で具体性を欠き、それだけでレイエスの思想を一言のもとに表現している訳ではない。しかしながらこの二つの引用は、二つの点で示唆的である。即ち、第一に、「優れた文士」、「偉大なユマニスト」であるレイエスはアメリカ論においても矚目に値する仕事を残しており、その足跡を辿ることは無駄なことではないということ。そして第二に、後の世代はレイエスのアメリカ論に多くを教えられたのであるから、その全体像を明らかにすることはその後の思想史・文化史の全体像を描くためにも有益であるということである。そういった展望のもと、多岐に渡るレイエスの膨大な著作群のうち、本論ではアメリカを巡る思索を取り上げ、その内容を明らかにしたい。

II

先に引用したカルペンティエールやピコン＝サラスに限らず、多くの論者はレイエスのアメリカ論を「最も固有で、真正な意味においてメキシコ的なものの根源⁷⁾」を探求した最初の試みとして位置付けている。いわばメキシコの（そしてイスパノアメリカの）文化的アイデンティティの探求という訳である。厳密に言えば、文化的アイデンティティの探求を行なったのはレイエスが最初でもなければ唯一でもない（例えば前述したロドの『アリエル』）。だが彼がとりわけ高く評価されているのは、「固有で、真正な意味においてメキシコ的なもの」の探求の結果、そこにヨーロッパ文化全般にも通ずるような普遍性を見いだそうと試みたという点においてなのである⁸⁾。普遍性を見いだす試みというのは、例えばレイエスの無数に残したエッセイのうちでも知名度の高いもののひとつである「ヴェルギリウスをめぐる」(1930)においてなされたように、イスパノアメリカを古典ラテン文化の正統な継承者と見做すものなのである⁹⁾。

しかし、イスパノアメリカの文化の普遍性などという言い方は注意して理解されなければならない。一般に普遍性などと言うと「我々のメンタリティは、既に述べたように我々の土地に根ざしているのだが、と同時に本

質的に国際的なものだからだ」というような認識と解されようが、そのような認識はこの引用の直後で自身述べているように、ホセ・バスコンセロス『宇宙的人種』（1925）のごときイスパノアメリカ文化の未来像にかかる期待を基礎づけるものとして表裏一体であられるからだ¹⁰⁾。いかにも実際レイェスの作品（特に1930年代の講演に基づくエッセイ）には、イスパノアメリカ文化をそのような意味でも普遍的なものとして強調し、それを更に継承することによって将来の発展への希望を見いだすといった類の主張が数多く見られ、それが彼の思想の根幹であり、後の世代に受け継がれた重要な論点のひとつであるには違いないのだが¹¹⁾、その点に関してはレイェスはむしろバスコンセロスと思想——というよりも希望を分かち合っていたに過ぎないし、なによりそのような希望はロドの『アリエル』から引き継がれたものに他ならないのだから、レイェスの主張もロドのエッセイによって広がった「アリエル主義」と呼び得る思潮に容易に回収される危険性を孕んでいるのである¹²⁾。しかも「アリエル主義」というのは、イスパノアメリカにおける思想あるいは哲学が、その方法論的確立の時期(19世紀)以来一貫して問い続けてきたイスパノアメリカの人間であることの歴史的・文化的位相における存在serと当為deber serの探求という問題設定¹³⁾を大きく逸脱するものではない。そのような問題設定に囚われていては、レイェスの思想の独自性がわかりにくくなってしまいうだろう。そもそもレイェスがイスパノアメリカの文化の普遍性というとき、それは古典ラテン文化の正統な継承者ということであり、これはそれ自体極めて突飛で難解な認識を含むのである。それ故いまは当為の探求という問題設定は忘れ、彼の独特な存在探求、普遍性の主張のみをみるべきであろう。

実際、文化の普遍性の探求に関してレイェスは極めて独特の形でそれを行っていたので、彼の論じることは、自身必要不可欠と見做して行っていることでも、あまりにも性急に当為を問う論者達にとっては理解不能に思われることもあった。アルゼンチンやブラジルで大使の職にあった頃(1927-39)レイェスは、『モンテレイ』という小冊子を発行し、様々なテ

ーマについてのエッセイを発表していた。ところがそこでゴンゴラやらヴァレリーやらについて論じていたので、若いメキシコ人の作家エクトル・ペレス＝マルティネスから、より今日的な文学、特にメキシコ文学の方向性というような問題について論じるべきだとの非難を受けたことがあった¹⁴⁾。「我々はゴンゴラ——彼のアメリカの伝統との関わりは既に確立されているのだが——をある程度まで我々のもの *cosa nuestra* に変換してきた¹⁵⁾」というレイエスの自負など、ペレス＝マルティネスには理解不能なことだったのである。このゴンゴラやらヴァレリーについて論じる際の彼の自負は、作家がイSPANアメリカ文化を古典ラテン文化のみではなく、その後のヨーロッパ全般の文化の正統的継承者として見做していたということの意味するのである。我々はそのことを念頭においてレイエスのアメリカ論を見ていかなければならないのだ。

ところで、珍しく感情的な筆致の多いペレス＝マルティネスへの反論は、レイエスのアメリカ論にアプローチするための有益な示唆を含んでいるので、それをみることにしよう。そこでの論点は以下の五つに要約される¹⁶⁾。まず第一に、1913年から39年にかけてレイエスは国外にあり、その時期の大半をフランス、スペイン、アルゼンチン、ブラジルにおいて外交官として過ごしているのだが、その身分のために自分の意見がすなわち国の公式見解として受け取られかねず、社会的・時事的発言には細心の注意を払わねばならなかったこと。あるいは逆に国益を代表して、メキシコのために発言せねばならないこともあったこと。第二に、同じく不在であったために、ある種の情報には疎くならざるを得なかったこと。第三に、上のような理由も手伝って、時間的・空間的に長いスパンで物事を捉えるようになったこと。第四に、人間の知的活動には国境はないという認識。そして最後に、いかなるイデオロギーにも与しないように努めてるということ。こういった条件からレイエスの思想の特異性は出現したというのが彼の自己分析である。このうち最初の三つは不在、外国生活ということに関わってくることに注意しよう。作家自身に導かれるまま、まずここを足掛

かりとしてレイェスの足跡を辿ってみる。

III

メキシコ革命（1910—）に先んじて長く独裁制を敷いたポルフィリオ・ディアス政権下で軍事大臣も勤めたベルナルド・レイェス將軍を父としてモンテレイに生まれたレイェスは、フランス式の初等教育を受けた後、当時のエリートの進路として定着していた国立予備学校Preparatoriaから法学部進学のコースを辿り、法学士のタイトルを獲得した¹⁷⁾。1913年、革命のどさくさに紛れて父が暗殺されると、それを機に革命を逃れるようにメキシコを去り、在仏メキシコ大使館に勤務。14年、第一次世界大戦の戦火を逃れるべく撤退した大使館を去り、スペインに移る。オルテガの主催する雑誌《エスパーニャ》等に寄稿し糊口を凌ぎつつ、後にラモン・メネンデス＝ピダル率いる歴史学研究所でスペイン古典文学叢書の編纂に携わる。19年以降は大使館の職に戻り、24年まで勤める。その後27年まで在仏メキシコ大使として二度目のパリ体験。27年から39年まではアルゼンチンとブラジルで交互に大使を勤める。39年の帰国後は文筆に励む一方、大学院大学《エル・コレヒオ・デ・メヒコ》の設立に尽力、後進の指導と国外の知識人たちを招聘しメキシコの高高等教育の発展に力を注いだ。

このような経歴のなかでレイェスの思想形成にとって重要だったのは、長い外国生活、とりわけフランス、スペイン滞在であった。このことの重要性についてはホセ＝ルイス・ゴメス＝マルティネスも指摘しているが¹⁸⁾、この指摘をまつまでもなく、レイェス自身もそのことは認識していた。上で挙げた五つのポイントのうち三つまでが外国滞在に関わるものであった。さらに、三つ目のポイントに関係してくるのだが、別の場所でも一般論の形をとり、「不在と隔絶は我々に祖国をパノラマ的に観ることを教えてくれる¹⁹⁾」と、いわば不在の効用とでも言うべきものを語っている。では、ヨーロッパ体験は作家にとってどのような意味で大切だったのか。

略述したように、レイェスはヨーロッパに滞在した期間の大半を外交官

として過ごしている。そのため発言に注意しなければならなかったこと、同時にメキシコの国益のために発言することもあったことは既に見た。「国益のために」というのはいささか大げさな表現かも知れない。既に刊行されている文章から確認できることは、レイェスはメキシコ、およびイスパノアメリカを正しく理解させるべく奮闘したということである。これは先に五番目に挙げた自身の態度表明とは矛盾しているように響くが、イデオログ的にヨーロッパの人々に対峙しなければならない場面が時としてあったのだ。例えばピオ・パロハの些細な一言（「アメリカの人々は人間のようには見えない」）に噛み付き、反論したことがあった²⁰⁾。ただその際に重要なことは、レイェスがこの発言をパロハひとりの偏見に帰すことはせず、ヨーロッパの人々に共通の、アメリカに対する間違っただイメージ（彼はそれを「伝説」と呼んだ）の産物としたことである。そして返す刀でこの「伝説」の形を告発し、いちいち例を挙げて反論している。彼の告発した「伝説」というのは、すべてのイスパノアメリカの国々は「小さな暑い国」*petit pays chaud*だという思い込み、アメリカの国々は島であるという空想、すべてのアメリカの人々は黒人であるという先入観、アメリカには鸚鵡しかいないという偏見、等である。ここでレイェスが告発したポイントが「伝説」の全体ではないだろうが、いずれにしろこの告発は非常に重要なものである。このような「伝説」に覆われた目でヨーロッパ人がアメリカを見ていること、「伝説」が非常に根強いものであることに気付いたレイェスは、別の場所で、「それにしても、アメリカが発見されたなどと誰が言ったのだ²¹⁾」という問いを発し、アメリカの真の姿がヨーロッパでは理解されていないと喝破したのである。ラファエル・グティエレス＝ヒラルドは、レイェスがアメリカを詩人や哲学者たちのでっちあげた作りごと*invención*と見做していると論じたが²²⁾、それはアメリカが真に理解されておらず「伝説」に覆われているのだという作家のこの認識から出発するものなのである。

アメリカが詩人や哲学者の「作りごと」だとするレイェスの論は本論を進めるに従って明らかになるだろう。その前に、作家にとってのヨーロッ

パ体験の重要さをもう少し見なければならぬ。上でレイェスが次のように言っていたことを思い出そう。つまり、彼は可能な限りのメキシコの情報に触れるべく努力していたが、不在のためにどうしてもある程度同時代の情報には疎くならざるを得なかったということ、そして時間的・空間的に長いスパンで祖国を眺める、つまり「パノラマ的に」眺める術を得たということ。後者はおそらく前者の結果である。同時代の状況に疎くならざるを得ないということは、積極的に解釈すれば、メキシコ国内の真にアクチュアルな状況から自由であり、比較的自由的な発想で思考することができたということである。また、文献を通じてのみアメリカを、そしてメキシコを眺めていたというが、その文献は同時代のものが制限されていたため、渴えた好奇心から歴史的文献にも広く目を通すようになったと言えるだろう。そうでなくてもメキシコでの青年時代からレイェスは古典や歴史への指向性を強く持っていた。その上彼は、既に述べたように、スペインにあってはメネンデス＝ピダルに師事し、文献学の訓練を受け、古典叢書の刊行に携わっていたのである。実際に、スペイン滞在中に書かれたエッセイを集めた『共感と差異』全五集（1921-26）には、ロシア史を始めとする歴史的柄やスペイン・イスマノアメリカその他あらゆる地域の古典文学を扱ったエッセイが数多く見られるが²³⁾、そのことがレイェスの歴史への指向性を証明している。

例えばアレホ・カルペンティエールは1928年から39年までパリで亡命生活を送っているが、その間「クリストーバル・コロンの書簡からインカ・ガルシラーソを通じて18世紀の著作家達まで、可能な限りのアメリカに関する本²⁴⁾」を読み漁ったという。彼がそれによってアメリカを再認識し、後に優れた作家となり、パリ体験で蓄えたものを小説に開花させたことはよく知られている。それと同様の、歴史的・古典的文献によるアメリカの再認識を、カルペンティエールに十数年先んじてレイェスは行なったのではないか。それがここでの二つのポイントから引き出し得る予測である。事実、スペイン時代の初期に既にレイェスは、古い文献に親しんだ成果——『共

感と差異』に収められた一篇のエッセイのタイトルに従えば、「古文書館のポエジー」——と思われる作品を発表する。『アナワクの眺め』（1917）と題されたこの作品は、おそらくレイエスの全作品中もっとも有名なものであり、後にアドルフォ・カスタニョンによって今世紀スペイン語で書かれた最大の散文詩のひとつと評価されることになる²⁵⁾。その美しさによって征服期いらい多くの年代記者たちを魅了したアナワク（現在のメキシコ市およびその周辺の盆地部の古称）の様子を、その年代記を引きながら再構成してみせたこの作品は、「古文書館のポエジー」と呼ぶにふさわしい一篇であろう。が、何よりも重要なのは、この作品冒頭に既に「十六世紀の歴史家達は当時みつかったばかりの土地の性質を固定した。その性質というのは、その土地がヨーロッパの目に映じた通りに記述されたものであったので、驚きによって強調され、時として誇張されたものとなった²⁶⁾」という分析が見られることである。レイエスはここで、自分の観察したヨーロッパにおけるアメリカの「伝説」と同様の誤ったイメージが既に16世紀に流布されていたこと、つまり「伝説」は年代記者達から受け継がれた歴史的なものであることに気付いたのである。

件の「伝説」はアメリカの国々が「小さな暑い国」であつたり、島であつたり、黒人だけが住んでいたり、鸚鵡だけが飛んでいたというものだった。それらの「伝説」の要素のうち例えば島であるという思い込みは、実は「伝説」の歴史的生成の様を知るのに格好な、極めて重要な指標となるものなのである。歴史的文献を渉猟するうちにレイエスはそのことに気づき、後に次のように論じることになった。

わが国キンタナ・ロー州海岸部のいわゆる《女の島》Isla de Mujeres や南アメリカのアマソナス [アマゾン] 川は、アマゾネス——ヘレネ時代ギリシャのよく知られた寓話による、女戦士達の血筋——の伝説を喚起する。イスパニアの最初の探検家達は、騎士道物語に教唆され、新世界の様々な場所にアマゾネスが存在すると考えたのである²⁷⁾。

ここでレイエスが指摘していることは、年代記者達の驚きによって誇

張され、いまだヨーロッパ人の間に根付くアメリカを巡る「伝説」として残っているものの根が、騎士道物語の記述に、そしてその本当の根源は既に古代ギリシャに見いださうること、である。このことに気付いたということは、レイェスのアメリカ論の展開にとっても、そしてまた彼自身の文化史上の位置付けにとっても大切な事実である。

IV

1940年代終盤、イSPANアメリカの歴史研究はあるひとつの興味深い局面に到達する。メキシコ国立自治大学UNAMに提出されたイダ・ロドリゲス＝プランポリーニの博士論文『アメリカのアマデイス』（1948）、アメリカ合衆国の研究者アーヴィング・レオナードの『勇者の本』（1949）が相次いで騎士道物語と征服期のスペイン人との影響関係を記述したのである²⁸⁾。前者はエラスムス主義と呼ばれる理性的思考を旨とする潮流と拮抗しつつ、当時流行した騎士道物語のような破天荒な冒険を高揚する感情がスペイン人の間に浸透してゆくさまを辿り、そのことのひとつの結果として年代記と呼ばれるアメリカ大陸への旅行記の作者達の筆致が騎士道物語的記述に強く影響されていることを示した。後者は当時アメリカ大陸からスペインの本屋へ出された注文書などの資料をふんだんに掲載し、征服者達が騎士道物語をどのように読み、自身を物語に投影し、行動したかを分析している。アーサー王と円卓の騎士やトリスタンとイゾルデらの話をモチーフとして、貴族階級の洗練とともに育まれたフランスの宮廷恋愛物語の末裔ともされる、散文で書かれた遍歴の騎士たちの冒険の物語、騎士道物語ではあるが、これが15世紀末から特にスペインで異例の繁栄を見た。『アマデイス・デ・ガウラ』（1508）を頂点とするこのジャンルが後にセルバンテスによってパロディ化されたことなどは今更言うまでもないが、アメリカ大陸の征服にも大きな影を落としていたのである。パタゴニア、アマゾン、カリフォルニア等の騎士道物語に由来する地名がそのことを何よりも雄弁に語っているだろう。上の引用においてレイェスが述べていたのも、

そのようなことであったのだ。

このような二冊の書物の出現は、また、それに前後するより大きな思潮に回収されるべきだろう。より大きな思潮とは、征服者達の認識を問う、ということである。ベネズエラの作家アルトゥーロ・ウスラル＝ピエトリは『ベネズエラの文学と人々』(1946)の冒頭に「ベネズエラの発明」という章を設けた。そこで彼の行なったことは、クリストーバル・コロン(コロンブス)の書簡に始まる初期の征服者達の年代記がベネズエラをどのように描いていたかを浮き彫りにすることであった²⁹⁾。第三回目の航海でコロンは、パリア地方、即ち現在のベネズエラ北岸、オリノコ河口デルタ地帯の手前まで来ている。その際、その先に存在することが予想し得る大陸は、自身の説からはあってはならないものだったため(彼は自分の辿り着いた島々がアジアの一部と考えていたので、そこが本当にアジアならば、その南東部、パリア地方に大陸はあってはならない)、コロンは複数の淡水の流れ(つまりデルタ)を手がかりに旧約聖書を引用し、そこを「地上の楽園」と呼び、自説の矛盾を隠蔽した。ついでアメリゴ・ヴェスプッチがその地を真珠と巨人の島カンバリと呼んだ。ウスラル＝ピエトリはベネズエラが西洋世界との出会いの第一歩からそのような非現実的なイメージに囚われてきた様子を明るみにしたのだった。暫らく後にメキシコの歴史家エドモンド・オゴルマンは、同様に「発明」の語を掲げ、コロンその人の認識を詳しく問題にしている³⁰⁾。『アメリカの発明』(1958)というその本の中でオゴルマンが行なったことは、第一に、「アメリカ大陸は1492年10月、クリストーバル・コロンによって発見された」という、当時まだ自明のことと見做されていた説の歴史性を明らかにし、その妥当性に疑問を呈することであり、第二に、15世紀後半のヨーロッパにおける世界観・認識の地平の上にコロン自身の認識の視座を捉え直し、そこから彼の航海日誌や書簡を読み直してゆく作業であった。前に述べた「地上の楽園」にしろ、二回目の航海でキューバ島南岸の地形を当時のアジアの地形図に無理矢理なぞらえてみた顛末にしろ、自身の西インド諸島への到達が当時のヨーロッパに引

き起こした論争・情報の錯綜の中で、自説を固持するため二転三転し歪んでいったコロンの世界観が浮き彫りにされる。

発明という単語の提示といい、コロン（や後の征服者達）の認識、あるいは彼らの残した記録の筆致に目を向ける姿勢といい、明らかにウスラル＝ピエトリとオゴルマンの作業は連動している。同様に明らかなのは、彼らの作業はロドリゲス＝ブランポリーニやレオナードら騎士道物語と征服者達の関係を捉えた歴史家達とも同種のものであるということだ。彼らは皆、ある種の認識や思い込み、世界観がどのように受け継がれ、征服者や年代記作者の認識を規定し、それが現代の現実や人々の態度にどのように受け継がれたかということ、アメリカ大陸を巡る事柄に関して、扱っていた。より今日的な主題群の中に捉えて言えば、彼らはアメリカを巡るディスクールを分析していたのである。

周知のように、言説などと訳されることの多いこの語discoursは、1960年代に主にフランスを中心として起こった知の変化の中で、言語学者はもとより、哲学者、批評家などの研究の主題のひとつとして浮かび上がってきた語——というよりも概念である。「人が保持する言葉の総体」という一般的意味を持つ語であるから、例えば「アメリカのディスクール」というとアメリカについて語られる様々な事柄と理解すればよいが、それが哲学者たちの研究の主題になるのは、ディスクールが個々の言表énoncéを囲い込み、統率するようなある種の力を持ったなにかだからである³¹⁾。つまり、ディスクールは「歴史的機動力の中で、衝突によって動く」、「新規のディスクールはすべて、それを取り囲む、あるいはそれに先行するドクサに対抗する（あるいはしばしば組する）パラドックスとしてしか現われ得ない³²⁾」というロラン・バルトの指摘にあるように、語る主体、他者との関係性、イデオロギーなどを通して抜き差しならない力関係の発露の場を作る力を持っており、さらに、歴史的に分節、分散、制度化などの動きを見せ様々な認識の布陣を決定するものなのである。「つまり〈文学〉や〈政治〉はごく最近の範疇なのであり、それを中世文化やあるいは古典主義文化に

適用することは〔略〕できない。また文学や政治、および哲学や諸科学といったものも、17, 18世紀においては、19世紀にそうであったような仕方ではディスクールの領野を分節してはいなかった³³⁾」。

征服者達が騎士道物語に影響され、アメリカ大陸には大足の怪獣パタゴンや女戦士アマソナスがいると信じていたという事実は、現在の我々の常識から見て滑稽なものには違いない。しかし、だからといってこのことは、作り話（文学）と事実（歴史）を彼らが完全に混同していたということを意味してはいない。騎士道物語がいかに荒唐無稽であったとしても、それまで修道院や限られた階級の特権として隠されていた知の源泉としての書物が、グーテンベルクの活版印刷術の導入によって、まだ多くの迷信に囚われていた人々の前に大量に供給されるようになった時、真実の資料として受けとめられたとしても不思議はない。そのことをレオナードは強調していた³⁴⁾。つまり当時のヨーロッパの人々に、今日的基準から見て正しい世界観、認識というものはなく、逆にその時期は迷信や伝説に基礎をおいた騎士道物語の方がリアリティーを持っていたのである。実証的な事実検証に基づく「歴史記述」historiografíaとはどう呼びがたい作り話めいた記述によって記されてきた歴史から、「文学」（虚構や作り話という意味で）を浮きぼりにする（おそらく歴史的真相を獲得するために）こと。ロドリゲス＝プランボリーニ、レオナード、ウスラル＝ピエトリ、オゴルマンといった人々はそのような作業を行っていたのだ。彼らがアメリカを巡るディスクールを分析したというのはそういう意味である。

V

もちろん、レイェスは上に挙げた歴史家や作家たちと同じ地平に立っていた。ピオ・バロハに偏見に満ちた言葉を吐かせた「伝説」とは、人々の言表を統率しているアメリカを巡るディスクールなのであり³⁵⁾、その力に直面したレイェスは後にアメリカのディスクールの歴史的生成過程の一部としての騎士道物語と年代記の関係に気付いたのである。III節最後に引用し

た、《女の島》の名に騎士道物語の名残を嗅ぎ取った一節は『そんな場所などない』というエッセイからのものである。このエッセイは1924年の講演に基づき書かれたものであり、その点に着目すればロドリゲス＝プランポリーニやレオナードの本の出版年と比べ、彼の着眼がかなり早いものに思われるかもしれない。もっとも、このエッセイ自体はその後何度も書きなおされ、50年代に入ってやっとその一部が幾つかの雑誌に掲載されるようになり、現在の形で出版されたのはこれが収められている全集第11巻の刊行年(1960)であった³⁶⁾。それ故、その講演の時期だけをみて年代記と騎士道物語の関係に気づいたのはレイエスが最初であると唱えるのは早計に過ぎるだろう。残念ながら24年の講演の時点での原稿を参照できない我々としては、判断を下すことはできない。またその必要もない。おそらく騎士道物語と年代記を読んだ人間なら誰でもその関係を直感し得た筈だし、だとすればそれが歴史学者の仕事によって実証されるのは時間の問題であった筈だから。ただレイエスがこのテーマについて他の歴史家たちと認識を分かち合っていたことが確認できればよい。そしてもうひとつこのエッセイ成立を巡る事実から感得すべきことは、作家がいかにこのテーマに固執していたかということであろう。というのも、あくまでも騎士道物語と年代記の関係というのは、アメリカについての「伝説」つまりディスクール³⁷⁾の歴史的生成過程の一局面に過ぎず、むしろレイエスの最大の関心はその生成過程を根源まで遡ることにあつたのだから。

上の引用文でレイエスは、騎士道物語が年代記に侵入している例としてアマゾネス伝説を挙げていた。同時にアマゾネスとは古代ギリシャの伝説であることも示されていた。つまりアメリカを巡る「伝説」の根源は遡り得る限りで古代ギリシャに既に見られるのである。いや、古代ギリシャではなく、もっと遠く、古代エジプトにまで遡る。

人が夢の痕跡を残すようになって以来、新世界の存在の可能性が、奇妙な予感の形で現われる。既にほぼ紀元前三千年頃にはその妄想は形を取り始め、アヌービス [エジプト神話の死の神] が神秘的な西方

の一地域で死者たちを統括するようになる。西方に発見されざる地域が存在するという考え——時にそれは幸福な王国という喜ばしい表情を持ち、時に暗い海の表情を持つのだが——は、エジプトのもっとも古い史料に由来し、その人類学的根源は夕方の薄暮への神秘主義的信仰に見いだせる³⁷⁾。

古代エジプトではなく、もっと遙か遠く、前史からの人間の外部世界に対する恐れと憧憬とがないまぜになった感情、それが「新世界」アメリカの兆候だとレイェスは捉えた。それが如何にして現代の「伝説」に、あるいは年代記や騎士道物語に辿り着いたのか？ユートピアを通してである。ユートピア思想の起源とされるのはプラトンのアトランティス伝説であるが、上の引用のあとでレイェスは、このような「奇妙な予感」が受け継がれ、やがてプラトンのアトランティスの伝説に姿を変えたとしている。また別の場所ではアトランティスが「完全な国家のイメージとして現われた」ことと「西方からやってきて天変地異によって消えてしまった国家の脅威の記憶として現われた³⁸⁾」ことが重要だとし、それが外部世界への人の恐れと憧憬の感情に裏付けられていることを強調している。こうしてできたアトランティス伝説がどのように受け継がれることになるのか、《女の島》の名をアメリカの地に刻印した『エスプランディアンの偉業』の次の一節が示している。

Sabed que á la diestra mano de las Indias hubo una isla, llamada California, muy llegada á la parte del Paraíso Terrenal, la cual fué poblada de mujeres negras, sin que algun varon entre ellas hubiese, que casi como las amazonas era su estilo de vivir³⁹⁾. (お知りおき頂きたいのは、インディアスの右手、地上の樂園のすぐ近くに、その名もカリフォルニアという島があったということです。その島には黒人の女ばかりが住んでいて、一人の男もおらず、それはあたかもアマゾネスの如き生活の様式だったのです)

ここには「島」という特徴、「アマゾネス」の名が明確に記されている

が、同時に、それらに密接に関係づけられ、「地上の楽園」が言及されていることに注意しなければならない。「地上の楽園」とは、パリア地方に到達したコロンのでっあげであった。それがここでも再生されているのだが、この「楽園」と「島」の語の結びつきがユートピアを強く喚起することになるのだ。古来ユートピアは「島」として語られてきたのだから。

ユートピアに非常に頻繁に見られる特徴のひとつは、島であるということである。プラトンは彼の論じた失われたアトランティス地方を「島」と呼んだのであった。またカリプソがオデュッセウスに忘却と愛に満ちた休息とを提供するユートピアの宿は島であった。[略]そして『ドン・キホーテ』において優れた騎士が征服し、完璧な国家へと変えるべきものも島であったし、サンチョ・パンサの感動的な裁きが遂行された領土もバラタリア島の名で知られているのであった⁴⁰。

この引用のある『そんな場所などない』*No hay tal lugar*という、タイトルからして何処にもない場所たるユートピアを示唆しているエッセイにおいてレイエスは、プラトン以後のユートピア思想の系譜を綿密に分析しているが、その念頭にはユートピア思想はアメリカと密接な接点を持っているという信念があった。つまり、「これらの想像上の土地は、実際の発見に起源を与えがちなものである。神話的土地を捜すうちに、人はアメリカに会う⁴¹」。恐れと憧憬の対象としての外部世界にある楽園、ユートピアがアメリカに求められたとレイエスは論じるのである。

実際、特に1492年以降のユートピア思想はアメリカの出現と密接に関わってくる。「今日ではよく知られていることだが、まさにアメリカの発見がルネサンス期のヨーロッパにユートピア文学の絶頂を引き起こした⁴²」のである。個別の例をひとつだけ挙げるならば、トマス・モアの『ユートピア』にはプラトンやアウグスティヌスの影響が見られると同時に、ピサロによって滅ぼされる以前のインカ帝国の社会体制に関する情報が影を落としている⁴³。また逆に、インディオ達の理想の共同体をメキシコで組織したバスコ・デ・キローガはトマス・モアに発想を得ていたのであった⁴⁴。

もちろんアメリカの出現によって盛んになったユートピア思想には、常にプラトンのアトランティス伝説が底流として流れている。モアの『ユートピア』がプラトンの影響下にあることは一読すれば明らかである。一般的に言っても、次のような現象が見られた。

[...] 諸発見、特に15世紀以降の諸発見の時期には、つまりアフリカの地の驚くべき広さが確認され、それ以上に驚くべき出来事としてアメリカが出現すると、『ティマイオス』と『クリティアス』を読み、それにコメントすることが再び流行った。発見期の作家や地理学者の中にはプラトンの話を寓話として見做すものもいたが(アコスタの『インディアス自然文化史』など)、それを真実と認める者もいた。例えばオビエドやゴマラであり、そして誰よりも、当の発見者自身などである⁴⁵⁾。

アメリカの出現によって隆盛を極めるようになり、アメリカについてのディスクールの重要な一部をなすようになったユートピア思想には、常にアトランティス伝説とそれが引き継いだ古代からの外部世界への憧憬の念が込められているのである。ユートピア思想、つまりアメリカを巡る「伝説」のディスクールの根源にプラトンのアトランティスがあるならば、それも論じなければならない。先の「新世界」が存在するという「奇妙な予感」にふれたエッセイ「アメリカの前兆」は1920年に書き始められたものであること、再三引用した『そんな場所などない』の基調となった講演が1924年のものだったことなどから判断するに、1917年(『アナワックの眺め』出版年)までに征服者たちの驚きに気づいたレイエスはその根源を求め、20年代にはユートピアというキー・ワード、およびユートピア思想の起源であるアトランティスに注目するようになったと予想すべきだろう。事実30年代に入るとすぐ、彼は「多難のアトランティス」(1932)を発表しているのだった⁴⁶⁾。

周知のようにアトランティスは、プラトンが『ティマイオス』および『クリティアス』(特に後者)二編において言及した、「ヘラクレスの柱」の入

口（ジブラルタル海峡）の先（まさに《アトランティスの大洋》＝大西洋）にかつて存在したとされる強力な国家の伝説である。建設当時のアテネにとってそれは脅威的な存在であったが、一戦交えて敗れ、最後には地震と洪水によって海の底に沈んでしまったとされている。プラトンは『国家』の続編としてこの二作を書いたのであり、そこでは強力な軍事国家として成功をおさめたアトランティスの様子が詳述され、同時に『国家』において論じられた哲学者の王の治める理想的な都市国家に比すべき存在としてのアテネが描かれようとしていた。『クリティアス』は未完に終わっており、二番目の意図——および戦争の様子の描写——は挫折したままではあるが。このようなアトランティスの伝説は、一度はアリストテレスらによって否定されるものの、既に述べたように、アメリカの出現を機にトマス・モアらに受け継がれることによって、俄然ユートピアの起源として扱われるようになるだろう。

正確に言うと、プラトンのアトランティスはいわゆるユートピアとは性格を異にする。プラトンがユートピア的に描こうとしたのは、むしろアテネの方なのである。しかしほぼ完璧な国家であること、島とされていたことなどから、それはユートピアの起源と見做すべきである。「想像上の島にこそ、ユートピア論者達は完璧な国家を築いてきた⁴⁷⁾」というように、ユートピアとは遠く離れた島にある完璧で理想的な国家と定義し得るのだから。しかもアトランティスは、ある時期消滅してしまった島として描かれたのである。このこともまた、ユートピアにふさわしい特徴である。レイエスが他の場所で述べているように、ユートピア思想には「前進的」（未来に理想的な国家を夢見る）なもの、「遡行的」（過去に理想像をもとめる。聖書のエデンの園など）なものがあるからであり、消滅という出来事は後者、即ち一種のアルカディア幻想を誘うからである⁴⁸⁾。

また、アトランティスが突然消滅してしまったということから、その場所の特定というトピックが後に生まれる。このトピックは二つの局面を有する。一つはヨーロッパ世界にとっての外部の位置を示しているというこ

とである。ヨーロッパ世界が航海域や交易圏の拡大によって広がるにつれてアトランティスの予想し得る所在地は西へと追いやられる。《アトランティスの大洋》(大西洋)の向こうに現われた大陸がアトランティスと同一視されるにいたるのはそのためだ⁴⁹⁾。このようにしてユートピア思想がアメリカのディスクールに組み込まれるのである。場所の特定のトピックの二つ目の局面は、歴史的事実としてのアトランティスの存在、即ち伝説の根源に事実があるかいなかということである。「多難のアトランティス」の最後に向けてレイェスはこのことを論じている。地中海東部の住人が西方との接触を始めるのは紀元前13世紀以降であるから、アトランティスの伝説の起源はそれ以前のものである筈はなく、象その他の生物・自然の描写が『クリティアス』に見られることから、北アフリカの地を示している筈だとし、更に、『クリティアス』に描かれたアトランティスの文化様式が、リビア＝フェニキア近辺、時代にして紀元前1100年以降のものであるとつきとめる⁵⁰⁾。しかしもちろん、アトランティスの存在は確認できない。伝説の根源が何らかの歴史的事実であったのか、それとも単に他の伝説・伝承だったのか、それはわからない。レイェスはただフェニキアからリビア、エジプトを通過してギリシャに到達する過程において様々な要素が加わり現在の形になったアトランティス伝説成立の過程を、それこそが「たとえ歴史に依拠していたとしても、伝説の決定不能性と魅力を獲得⁵¹⁾」させた要素として受け入れているのである。

アトランティス伝説の根源に、つまりヨーロッパにおけるアメリカを巡る「伝説」というディスクールの根源に歴史的事実を確認することはできない。しかし、そのこと自体はレイェスにとっては重要ではなかった。彼の論にとって重要だったのは、事実に基づいているにしろそうでないにしろ、その魅力が語り継がれるための原動力となり、それがアメリカに投影されるに至った歴史的過程なのだから。アトランティス伝説がアマゾネス伝説と「地上の楽園」(即ち「遡行的」ユートピア)を再現した騎士道物語と結びつき、モアを生み、その後のヨーロッパにおけるディスクールを生

み出したことが重要だったのである⁵²⁾。ヨーロッパの思索の産物(ディスクール)がアメリカのイメージを決定してきたということを分析し提示したこと。これこそがレイエスのアメリカ論の最大の業績と言えよう。グティエレス=ヒラルドの先の引用に従えば、アメリカは詩人や哲学者が古代以来でっちあげてきた作り事・発明品*invención*ということなのである。

本論はレイエスの言うイスマノアメリカ文化の普遍性とは何かということから始まった。ここで見てきた論は「普遍性」という概念からはいささかずれたものかも知れない。しかしながらレイエスは、それが出現するより遙か以前からヨーロッパ世界においてアメリカが語られていたと見たのである。古代においてはその存在の可能性が、実際の出現後は様々なイメージの投射された世界として、アメリカは常にヨーロッパにおいても語られていたのだと。これだけ長期に渡って語り継がれる地域の存在、その文化とは普遍的なものと思われる資格を有しているのではないか。それがレイエスのいう「普遍性」の全体像ではないにしても、本論では以上のことが確認されたのである。

VI

ところで、アトランティス伝説の根源を確認できないことがレイエスにとって重要ではないというのは、次のような意味においても確認できる。即ち、たとえ確認できるような歴史的事実があったにせよ、それを認識し伝達・記述し、語り継ぐ人間の知的作業には常に外部に対する恐怖、憧憬などの、事実に帰することのできない諸要素が介入してくるものであり、そのような要素の介入のために伝説やら虚構の物語が生まれるべくして生まれるのだということが予想し得るという意味においてである。事実、ユートピア思想を分析した『そんな場所などない』においてレイエスは、次のような概観を述べている。

哲学者が社会の法的起源と基礎とについて自問する時、彼は一種の小説を感得し、人々が一堂に会して近所関係やしきたりについて話し

合う様を想像するのである。

[略] 哲学者が我々の未来社会、紛争に巻き込まれることのない社会の性質について自問する時、彼は一種の小説を感得し、人々が一堂に会して情熱やら嗜好やらの統御、および関連性について話し合い、自己の幸福が実現されると同時に他の人々の共益に有効に働き得るよう努める様を想像するのである⁵³⁾。

レイェスは、先に紹介した「前進的」と「遡行的」二つのタイプのユートピアには「一種の小説novela」が常に介入すると言っているのである。novelaを小説と訳すと近代のある限定された文学ジャンルに響くかも知れないが、ここではもちろん、虚構、嘘、作り話といった比喩的な意味に解すべきである。しかしこれは、「前進的」であれ「遡行的」であれユートピアは単なるフィクションだということを意味しているのではない。ユートピア思想が「社会の法的起源と基礎」、「紛争に巻き込まれることのない社会の性質」など、社会科学の分野において真剣に論じられている主題を同様に扱ったものなのであり、ということは社会科学全般にも「一種の小説」が感得できると言っているのである⁵⁴⁾。もう少し言葉を足せば、レイェスは人間の知的活動全般に虚構や作り話（そういったものを本論では括弧つきの「文学」と表現してきた）が介入すると、つまり「文学」的ディスクールがすべての知的・言語活動に侵入すると述べているのである。上の『そんな場所などない』からの引用だけではそのことを十分に説明することはできないが、彼が1940年代に入ってすぐに取り組んだ大部な理論書である文学論において、そのことが明示されている。彼の文学論をここで紹介する余裕はなく、それは我々の今後の課題ということになるのだが、そのような人間の知的活動全般に渡って展開される理論の輪郭を明らかにして初めて、彼の言う文化の普遍性の全体像は明らかになる筈である。

注

- 1) たとえば, Jean Franco, *La cultura moderna en América Latina* (1967), Trad. Sergio Pitol, México, Joaquín Mortiz, 1971, pp.61-3; José Luis Abellán, *La Idea de América — Origen y evolución —*, Madrid, Istmo, 1972, p.98.などを参照。
- 2) Álvaro Matute, “El Ateneo de la Juventud: grupo, asociación civil, generación”, *Mascarones — Boletín del CEPE —*, 2 primavera de 1983, México, UNAM pp.16-26.
- 3) Franco, *op. cit.*, p.62.
- 4) Alejo Carpentier, *Entrevistas*, La Habana, Ed. Letras Cubanas, 1985, p. 302.
- 5) Mariano Picón Salas, *De la conquista a la independencia — Tres siglos de historia cultural hispanoamericana —*, México, FCE, 1944 (Col. Popular: 1965), p.7.
- 6) アメリカという語は本論ではアメリカ大陸全般を指示するものとする。というのは、後に明らかになるように、アメリカ論という場合、歴史に言及する場合も多く、その際アメリカ合衆国やメキシコ等という近代国家の区分は重要ではなく、ヨーロッパに対する新大陸としてのアメリカという局面が強調されているのだから。
- 7) José Luis Abellán, *op. cit.*, p.158.
- 8) *Ibid.*, pp.159-60.
- 9) Alfonso Reyes, “Discurso por Virgilio”, *Tentativas y orientaciones* (1944), *Obras Completas de Alfonso Reyes*, Tomo XI, México, FCE, 1960, pp.157-81.
- 10) Reyes, “Notas sobre la inteligencia americana”, *Última Tule* (1942), *ibidem* p.87. ちなみに、『宇宙的人種』*La raza cósmica*とは、イスパノアメリカの混血の状況に基礎を置いた将来に期待される人種とその文化的優越を説いたバスコンセロスのエッセイである。
- 11) そのような傾向の代表的なエッセイとして, “Atenea política”, *Tentativas y orientaciones*, pp.182-203; “Posición de América”, *ibidem*, pp.254-270. 等がある。
- 12) José Enrique Rodó, *Ariel* (1900), México, Espasa-Calpe Mexicana (Col. Austral), 1989 (9ª. ed.). 参照。このエッセイは、シェイクスピアの戯曲『テンペスト』の登場人物プロスペローがイスパノアメリカの若い知識人たちを前に演説を行なうという形式をとっており、そこにおいて、アメリカ合衆国

- の功利主義的資本主義への対抗から、ギリシャ・ラテンの正統な後継者たるイスマノアメリカはその遺産を受け継ぎ、文化的優位を示すべきだとの主張が展開されるのである。いわゆる「アリエル主義」とそのメキシコにおける展開については、Franco, *op. cit.*, pp.48-92. 参照。
- 13) Arturo Andrés Roig, “Interrogaciones sobre el pensamiento filosófico”, Leopoldo Zea (Coordinación e introducción), *América Latina en sus ideas*, México, UNESCO/SigloXXI, 1986, pp.49-52.
- 14) このことの間緯, およびベレス＝マルティネスへのレイエスの反論は, “A vuelta de correo”(1932), *Obras Completas*, Tomo VIII, 1958, pp.427-49. 参照。
- 15) *Ibid.*, p.428.
- 16) *Ibid.*, pp.428-46.
- 17) レイエスの伝記的事実に関しては数多くの本を参考にしたが, 特に *Alfonso Reyes, dato biográfico y bibliográfico*, Monterrey, Univ. de Nuevo León, 1955; Alfonso Reyes, *Diario 1911-1930* (Prólogo de Alicia Reyes, Nota del Dr. Alfonso Reyes Mota), Guanajuato, Univ. de Guanajuato, 1969. など。
- 18) José Luis Gómez Martínez, “Posición de Alfonso Reyes en el desarrollo del pensamiento mexicano”, *Nueva Revista de Filología Hispánica*, Tomo XXXVII, Núm. 2 (Centenario de A.R. 1889-1989), México, El Colegio de México, 1989, p.435.
- 19) Reyes, “Discurso por Virgilio”, *cit.*, p.176.
- 20) Reyes, “Entre España y América”, *Los dos caminos, 4ª serie de Simpatías y diferencias* (1923), *Obras Completas*, Tomo IV, 1956, pp.338-43.
- 21) Reyes, “Utopías americanas”, *Última Tule*, p.102.
- 22) Rafael Gutiérrez Girardot, “La imagen de América en Alfonso Reyes”, Reyes, *Vocación de América (Antología)*, Prólogo y selección de Víctor Díaz Arciniega, México, FCE, 1989, pp.32-53.
- 23) これらのエッセイはすべて *Obras Completas*, Tomo IV. 所収。
- 24) César Leante, “Confesiones sencillas de un escritor barroco”, Helmy F. Giacomani(ed.), *Homenaje a Alejo Carpentier*, New York, Las Américas Publishing, 1970, p.21.
- 25) Adolfo Castañón, “Reyes y el duende fugitivo”, Víctor Díaz Arciniega (compilación), *Voces para un retrato*, México, UAM/FCE, 1990, p.38.
- 26) Alfonso Reyes, *Visión de Anáhuac* (1917), *Obras Completas*, Tomo II, 1956, p.13.

- 27) Reyes, *No hay tal lugar*, *Obras Completas*, Tomo XI, p.352.
- 28) Ida Rodríguez Prampolini, *Amadises de América — Hazaña de las Indias como empresa caballeresca —*, México, Academia Mexicana de la Historia, 1990; Irving A. Leonard, *Los libros del conquistador*, Trad. por Mario Monteforte Toledo, México, FCE, 1953. また、増田義郎、『新世界のユートピア』(1971), 中公文庫, 1989, 67-86ページは、上の二冊にも依拠しながら、征服者達が如何に騎士道物語に影響されていたかを説き明かしている。
- 29) Arturo Uslar Pietri, *Letras y hombres de Venezuela*, Caracas-Madrid, EDIME, 1958, pp.15-25.
- 30) Edmundo O' Gorman, *La invención de América — Investigación acerca de la estructura histórica del Nuevo Mundo y del sentido de su devenir —*, México, FCE (Serie Lecturas Mexicanas), 1984.
- 31) ミシェル・フーコーは逆の方向からこれを定義した。即ち、言表とは「ディスクールの原子」であると。Michel Foucault, *L'archéologie du savoir*, Paris, Gallimard, 1969, p.107ss.
- 32) Roland Barthes, “Écrivains, intellectuels, professeurs”, *Le bruissement de la langue (Essais critiques IV)*, Paris, Seuil, 1984, p.354. 強調は原文の斜体。
- 33) Foucault, *op. cit.*, p.33ss.
- 34) Leonard, *op. cit.*, pp.26-44. 中世ヨーロッパの人々の間に浸透していた外部の世界についての迷信に関しては増田義郎(前掲書, 特に24-38ページ)が概説している。
- 35) 別の場所でもレイエスはアメリカについての謬見(「伝説」)を取り上げ、これを「レトリックの疫病」と呼び、パロハは「そのペンの真の持ち主というよりは犠牲者」であるとしている。これがつまりディスクールの力であり、彼は明らかにそれに意識的であったのだ。“Sobre una epidemia retórica”, *Los dos caminos ..cit.*, p.349.
- 36) Reyes, *No hay tal lugar*, p.336.
- 37) Reyes, “El presagio de América”, *Última Tule*, p.12.
- 38) Reyes, “La Atlántida castigada”, *Sirtes [1932-1944]*, *Obras Completas*, Tomo XXI, 1981, p.136.
- 39) Garcí Rodríguez de Montalvo, *Las sergas de Esplandián*, BAE, TomoX-L, Madrid, 1909, p.539B.
- 40) Reyes, *No hay tal lugar*, p.351.
- 41) Reyes, *ibid.*, p.346.
- 42) Reyes, *ibid.*, p.364.

- 43) Jean Servier, *Histoire de l'utopie* (1967), Paris, Gallimard, 1991 (Nouvelle édition, Coll. Folio), pp.133, 142-7.
- 44) そのことをメキシコの歴史家シルビオ・サバラは1937年に明らかにした。Reyes, "Utopías americanas", p.97; Eugenio Ímaz, "Topía y utopía", Estudio preliminar de *Utopías del Renacimiento*, México, FCE, 1941, p.15. 等の紹介による。また、増田, 前掲書, 193-6ページも参照のこと。
- 45) Reyes, "La Atlántida castigada", p.142.
- 46) "La Atlántida castigada", pp.135-48.
- 47) *Ibid.*, p.141.
- 48) Reyes, *No hay tal lugar*, p.341ss.
- 49) Reyes, "La Atlántida castigada", pp.141-5.
- 50) *Ibid.*, pp.146-8.
- 51) *Ibid.*, p.147.
- 52) アメリカとの出会いに関するヨーロッパのディスクリールを研究する動きは、むしろ現在のほうが盛んになっているというべきだろう。例えば José Rabasa, *Inventing A-M-E-R-I-C-A — Spanish Historiography and the Formation of Eurocentrism*, Norman/London, Univ. of Oklahoma Press, 1993. また、ヨーロッパ人の「言説の形式である図像」(3ページ)を分析した多木浩二『ヨーロッパ人の描いた世界 — コロンブスからクックまで』, 岩波書店, 1991(特に1, 2章), やはり図像の問題をラテンアメリカに関するものに絞って扱った落合一泰「『アメリカ』の発明 — ヨーロッパにおけるその視覚イメージを巡って」, 『ラテンアメリカ研究年報』, No13, 1993, 1-38ページなど。
- 53) Reyes, *No hay tal lugar*, pp.341-2.
- 54) 事実『そんな場所などない』において「前進的」ユートピアに分類されたものの中には、例えばマルクス主義も含まれていた。*Ibid.*, pp.380-1ss.